

その十三 湖北

後期試験が終わって寒さがどん底の二月、湖北に出かけた。

琵琶湖でも北と南では風情がまったく違う。琵琶湖大橋に象徴される南部は活気に満ちた琵琶湖。対して湖北は雪が似合う静かな琵琶湖。

四月一日付けで豊中市役所に勤務する事が決まっていた。それまで暇なのでカメラを持って湖畔に立つ。カラーフィルムで撮影する気になれないのでモノクロが似合う湖北に来た。空はどんよりしている。やがて雲が切れ薄日が漏れる。読みは当たったがシャッターに力が入らない。

——もう仕事じゃないんだ

しばらくすると背後から子供のはしやぎ声が聞こえる。何気なしに声がする方へ歩き出す。小さな集落があつて十数人ほどの子供たちが古い軽トラックの周りに群がっている。低い荷台の上で肌の艶がいいが白髪の子供のせいかな初老に見える男が紙芝居をしている。

「弱い者いじめをするな！」

「わあ！ 月光仮面のおじさんや！」

「やっつけろ！」

「そう！ 月光仮面のおじさんは……」

何と！ オヤジだ。オヤジの紙芝居を見るのは初めて。オヤジも気付いた。流し目でチラッと見ただけで紙芝居を続ける。酒ばかり飲んでいたオヤジとは別人だ。こんな生き生きとした姿を見た事がなかった。

北風の中で子供たちが歓声を上げる。そして後ろでも……若い母親が何人かいた。

オヤジは衛生的とは言えない小さな引出しが並ぶ年代物の焦げ茶色の箱から、透けて向こうが見えそうな丸い煎餅シシイを二枚取り出す。一枚はそのまま、もう一枚を真半分に割る。半円の煎餅の端にハケでトンカツソース（多分）を塗って丸い方の煎餅に貼りつける。そしてハケの端でチョンチョンと目と鼻？ 口？ を加える。

「ウサギや！」

そう、ウサギに見えるから不思議だ。真半分に割った方が耳だ。

「かわいい！」

順番待ちする女の子が両手を握りしめてピョンピョン跳ねる。オヤジは次々と煎餅をウサギに仕立てては笑顔で配る。ところがすぐ食べない。

「ウサギちゃん、ごめんね」

しばらく見つめてから耳を外して食べ始める。みんな同じように耳から食べる。

「おいしい！」

その十三 湖北

たわいもない煎餅は子供たちにとって可愛いごちそう。オヤジは優しく見守る。ほぼ食べ終わったのを見計らって頭を下げる。

「今日はこれで、おしまいー」

「えー」

驚く子もいれば、まだ、かじっている子もいる。

「あしたも？」

「いや、あしたは別の所じゃ」

「エエ！」

「次は？」

「そうじゃなあ。来週かな」

ひとりの女の子がオヤジに近付く。

「らいしゅう？ らいしゅうって？」

「それは……必ず来る」

「ほんまに！ じゃあ、これ、して」

その女の子が背伸びすると小指を差し出す。オヤジは屈カガむと指切りげんまんする。

「わかった、わかった。約束じゃ」

「ぜったい来てや」

子供たちがオヤジに手を振りながら親と一緒に帰っていく。俺は先ほどの女の子の背中をずつと見つめ続ける。

*

小雪がちらつくが寒くはなかった。むしろ心は温かかった。道具を片付けるオヤジと言うより旧友に歩み寄る。

「久し振りやな。どや、元気にしとるか」

「久し振り？ これって親子の挨拶アイサツかいな」

「元気なのは分かった。何してる？」

「急に老けたな。オヤジこそ何してんねん？」

「見てのとおりじゃ」

「儲かるか」

「ぼちぼちじゃ」

「なんぼ、もうてんねん」

オヤジは荷台から降りて運転席に座る。

「十円。乗れ」

助手席に座ろうとするが座席はボロボロ。汚れても構わないがオヤジは素手で座席をぬぐう。
「ホコリはたまつとらん。古いだけじゃ」

「十円は安すぎるで」

「子供相手じゃ」

「せやけど……さっきの売上は？」

小さな布袋を揉む。

「三百円ぐらいじゃ」

なんとも言えない表情をする。

「わしは……」

ヤケに口数が多い。溜^ツまった話を子供たちにするわけにはいかない。だから俺にぶつける。ポンポンと道中の話が飛び出す。俺はフンフンと頷^ウくだけで黙^モって聞く。その中身は結構含^{ガン}蓄^{チク}に富んでいた。旧友ではなく人生の大先輩だった。

*

敦賀駅に着いた。三年ほど前の夏、この先の港から車をフェリーに乗せて守^モと苦小牧へ向かった。

「結婚したんか」

降りようとするとオヤジが笑いながら言う。

「アホな。まだ二十一。来月で二十二や。結婚してたら、こんなとこに来るはずないやろ」

「そうか……お前が生まれた時、わしは二十一やった」

その十三 湖北

時代が違うと言えればそれまでだが、俺の歳にはオヤジは父親になっていたことに複雑な気持ちになる。甲斐性なんか関係ないのか。でも、お袋は早死にした。

「息子の歳ぐらい覚えとけよ」

「アテはあるんか」

「アテ？ 結婚相手の事か」

「そや」

「あれへん。エエのん、おつたら紹介して」

「一杯居るけどなあ……お前には若すぎる」

思わず声に出して笑う。

「せや。俺、あのボロ家に住んでる。鍵もかけんと出て行くなんて無茶苦茶や」

「なーに。鍵は潰れとるし、盗まれるモンはない」

——何といういい加減さ！

「そのカメラ……」

オヤジが首からぶら下げたカメラを見つめる。

「……お前のか」

「うん」

「そうか。安心した」

「安心？」

「一応、喰うぐらいは稼いでるんやな」

確かに一眼レフカメラはサラリーマンの一ヶ月分の給料以上の値段がする。でも今はアルバイトの身。

「オヤジよりマシや」

オヤジはなんとも言えない表情をする。

「風邪ひかんようにな。ほんだら」

ドアを閉めて駅に向かうと爆発音がする。振り返ると白煙を残してオンボロ軽トラックが走り去る。

*

——オヤジは四十代か……

苦笑する。

——四十代？

俺は四十という数に奇妙な事を思い出す。オヤジは冬見の夫とほぼ同じ歳だ。冬見は二十歳以上も年配の男と結婚した事になる。

今度は紙芝居を見ていた子供たちの生き生きとした表情が甦る。特にオヤジと指切りげんまんした女の子が忘れられない。確かに若すぎる。

——ぜったい来てや……か

あの可愛らしい女の子と二十年とは言わないが、十数年後に結婚してもおかしくはない。

——歳の差なんて関係ないのか。それにしても結婚か……

脳裏にふと一年前に結婚した知秋チズキの顔が浮かぶ。

——一年でも二年でもと、付いてきたら、結婚したかも……

でもあのまま結婚したら……その後守モリと夏子が結婚したら……知秋は俺と一緒にならなくて良かった事だけは確かだ。富山の旅館で俺がブレーキを踏んだのは言い逃れではなく正しかったと思う。一緒になつていたら自暴自棄になつて何の因果もない知秋に当たり散らすだろう。

——そうかな？

一緒に神大の夜学に通つて前向きに生きて行けたかも？ 知秋なら何の文句も言わずに連れ添つてくれるような気がした。

苦笑しながらもう一度オヤジが去つた方向を見つめる。とにかく俺に何一つしてくれなかつたオヤジ。軽蔑していた。でも、今日、初めて紙芝居で子どもを喜ばす姿を見て、懐かしい先輩に合つたような気分になつたのは……何故なんだ。

「結婚はまだか」

あの一言に親としての愛情を感じた。

偶然の為せる業か。失意のなか、家に戻っても不在だったオヤジに、まさか冬の湖北で会う

なんて。必然的な出会いなら理性が因果律を見出し出して行動する——なんて理屈をこねたが、一言で言えばこうだ。

「オヤジ！ いい加減にしろ！」

他方、偶然なら、理性は眠りから覚めずに感情が優先して感動を創る。確かに今日、オヤジに温もりを感じた。今の俺にはこういう偶然が必要なのか。

*

くたびれたディーゼル機関車に引かれた焦げ茶色の——煎餅が入っていたあの小さな引出しが並んだ箱と同じ色の四両編成の客車がホームに入ってきた。駅前の自販機で冷えたコップ酒を買って列車に乗り込む。ガラガラだ。一両で十分なのにこれでは赤字になるはず。その赤字列車が動く。

雪が強くなってきた。

雪見酒。蓋フタを開けて口に含む。冷たいから酒の味はまったくしない。蓋をして座席の下に置く。そこにはヒーターが通っている。しばらくすれば、ほどよい熱爛アツカシになるはず。

そのしばらくが俺の心を車窓から離す。また思考が始まる。これまでと違う美英子への思慕の念が浮かぶ。

「六甲駅に来なかったなあ」

疑問符をつけないで思い出す。

「あつ！ 確か、次の日も……その次の日も待つなんて書いてあつた」

次の日はホームを確認することなく大学に向かった。俺に対する行動、あれほど不思議なものはない。どのような意図があつたのか。何を思つてはぐらかすのか。

——待てよ。はぐらかしているのは俺？ まあ、何もかも終わった

と、思いながらも美英子は消えない。感情の赴くまま歩く美英子には因果律なんてない。かと言つて、感情すべてが偶然だとすると偶然だらけになる。必然を無視した気まぐれ美英子の行動。女と男の単なる見解の相違なのか。それとも俺が鈍感で未熟なだけなのか。

——多分、心の補助線の引き方が違うんやろな

京都でのデートで始めて「マモル」と呼んでくれた事や「半分こ誘惑」を思い出して苦笑する。

——どうなんやろ

座席下のコップ酒に触れてみる。

——ぬるい

トンネルの中を規則正しいリズムを刻みながら列車は走る。

——けど、どう考えても美英子は守モリに気がある

窓ガラスに映る男前でない顔を見つめる。それにしてもこんな俺を好きになってくれた女子がいた事に驚く。

夏子……知秋、それにやはり冬見^{フユミ}……冬見は死んだ。「もらわれた」にもかかわらず幸せを掴めなかった。

夏子も「もらわれた」という意味では冬見と同じ養女だった。付き合っている時に気付いた。それが破局の一因になったのかも知れない。

知秋は結婚して幸せを掴んだ……と思うが、夏子は守と結婚して幸せになれるのか。それに……冬見は俺を最後まで見限らなかった。でも初恋の相手と言うよりは青い想い出の女の子。青春に目覚めたという意味では初恋の相手は夏子だ。だから知秋に恋人という想いを持ってなかった。それでも思い出深い顔が浮かぶ。

ここでハタと気付く。

——この中に美英子が入ってない！　なんでや……

座席下のコップ酒を取り上げる。ちようどいい塩梅^{アンバイ}だ。蓋を開ける。香りがツンと鼻をつく。口を含む。温かみが口から身体全体に染みわたる。でも心は冷えたまま。

「もう終わった」

この言葉も癖になった。

いつの間にか規則正しい反響音が消えて列車はトンネルを出て速度を落とす。やがて名もない駅に停車するはず。

外はもうすっかり暗い。どうやら淋しい事だけは確かだ。